

今読まれた福音は、ここ数週間読まれているマタイ 5 章から 7 章までつながる一連の「山上の説教」の一部分です。今日の福音でイエスは、天の国にふさわしい生き方をするようにと人々に呼びかけています。呼びかけられているのは、復讐してはならない、求める者には与えなさい、敵を愛しなさい、そして完全な者となりなさい、という内容です。これら呼びかけにわたしたちはどう応えているのでしょうか？

先日わたしは、人と待ち合わせるために駅の周りを自転車を引いてうろうろしていました。すると、駅前の交番のおまわりさんから「あなたは、ここを何度も往復していますが何をしていますか？」と聞かれました。「人と待ち合わせているんです。」と答え、それで済むかと思ったら「登録を確認してもいいですか？」と聞かれました。「登録」とは自転車登録のことで、もし本人の物でなければ、盗んだ可能性があるので取り調べよう、というつもりだったのでしょう。実は、わたしは神学生になってからこれで 3 回目の職務質問だったので「またか！」と怒りが湧いて来ました。結局、自転車を登録した神学生の名前を言えたので、そのまま「お疲れ様」と解放されました。それでも、不審人物に見られたようでいい気はしませんでした。だから、その後、待ち合わせた人と会えて、同じ交番の前を通った時には、ちょっとおまわりさんをにらみ返してしまいました。

聖書の話に戻りましょう。今読まれた福音は、旧約の教えを完成する 6 つのアンチテーゼ 反対命題（特定の肯定的主張に対する否定的主張）の 2 つです。

5 番目の命題が「目には目を、歯に歯を」です。この「目には目を、歯に歯を」の本来の意味は、「やられたら徹底的にやり返していい」ということではなく、被害を受けても同じ程度の報復までしかしてはいけないという「同害報復」を意味しています。しかし、イエスはこれを否定します。「決して相手に歯向かってはならない」と戒めます。被害を受けてもそれを甘んじて受けるように求めています。そうすることで、悪の連鎖を断ち切れるとイエスは考えています。

6 番目の命題は「隣人を愛し、敵を憎め」です。旧約聖書には「敵を憎みなさい」という言葉はもともとありません。けれども、旧約では隣人の対象を狭く捉えていました。第 1 朗読にもあるように、隣人とは自分の味方、兄弟や同胞、同じ民族の人だけを隣人とみなしていました。それ以外の人なら、憎んでも構わないという理解があったのでしょう。ここでもイエスは旧約の教えとは異なることを言います。「敵さえも愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と命じます。

さて、このような難しい注文をどうしたら応えることができるのでしょうか？先程のわたしのおまわりさんからの職務質問を例に考えてみましょう。

5 番目の反対命題「復讐してはならない」については、謙遜で柔和なイエスの姿に倣うことが大切です。わたしのように「自分はやましいことはしていな

い。失礼な。」という態度から「お役目ご苦労さんです。どうぞ気が済むまでお調べください。」と自分を相手の人に明け渡してしまうのです。にらんだりして反撃するのではなく、相手に身を委ねてしまうのです。このような態度は、イエスが、ゲッセマネの園で捕えられるシーンからイメージできます。柔和で謙遜なイエスの態度に倣いましょう。

6番目の反対命題、「敵を憎まず隣人のように愛しなさい」については、ある仏教の世界的指導者の話を参考に考えてみました。ベトナム人のお坊さんでティク・ナット・ハン¹という霊的指導者がいます。彼は、ベトナム戦争の時に母国のベトナムと相手国アメリカ、両方に戦争反対を訴えたため居場所がなくなってフランスに亡命することになりました。そのフランスで黙想の家のようなものを作って、世界中の人に平和を訴える活動をしています。このティク・ナット・ハンは、こう言います。「敵を愛することは無理だ。だから何もなくていいというわけではなくて、敵を愛する前に理解したらどうだろうか？いきなり愛そうとするから難しいので、まず敵を理解するところから出発したらいい。問題の解決の糸口はそこから見つかる」と言います。そして彼は、敵を理解することをレタスを育てることにとえます。家庭菜園でレタスを作って、上手くできないことがあります。そうすると、日当たりが原因か、水の量が原因か、肥料が足りなかったのか・・・と育たなかった原因を考えます。それと同じように、ゆるせない相手をレタスとして考えたらいいと言います。誰も、育たなかったレタスに「お前はできそこないのダメなレタス！」と責めません。育てたわたしのどこが足りなかったのかと考えます。わたしたちが敵だと見る人を育たなかったレタスだと考えてみる。つまり、相手を理解することに頭を向けるよう促します。その人がなぜそのようなことをするのかという理由を考えます。すると「あれは、そういうことだったのか！」と分かってきて、人を許せたり仲直りができるきっかけが生まれます。ティク・ナット・ハン は、相手を理解することで愛することは始まると言います。先程の職務質問のケースで考えれば、「わたしのよう な不審者を見つけることで犯罪を未然に防 げているのだろう」と考えるのです。また、「おまわりさんは市民の平和のた めに働いている。神父は、信徒の心の平和のために働いている。だから同じよ うなことをしている」と理解するのです。

さて、皆さんの日常生活ではいかがでしょうか？ わたしと似たことはない でしょうか？ ちょっとしたこと で人に敵意を持ったり、反発することがない でしょうか？ イエスが求めた天の父の完全な態度に 適っている でしょうか？

1 ティク・ナット・ハン (Thich Nhat Hanh 釈一行、1926年～) は、ベトナム出身の禅僧・平和運動家・詩人。ダライ・ラマ14世と並んで、現代社会における実際の平和活動に従事する代表的な仏教者であり、行動する仏教または社会参画仏教 (Engaged Buddhism) の命名者でもある。アメリカとフランスを中心に活動を行っており、世界でもっとも著名な仏教僧の一人である。ベトナム戦争中は、戦禍をくぐりながら、どちらの側にも立たず、非暴力に徹した社会活動を推進し、学校や病院を設立し、孤児たちの社会的支援や、死体の回収などを行なった。またアメリカにおいてベトナム戦争の終結を強く訴え、詩や著作を通してアメリカ社会に禅を根付かせるのに貢献した。その思想は、キング牧師に深い影響を与えた。(ウィキペディアより)

直面している問題はどれも簡単ではないでしょう。それでも、わたしたちは、謙遜に相手を受け入れ、相手を理解するよう招かれています。困難があってもイエスの呼びかけに応えていけるようにこのミサの中で願いましょう。

イエズス会司祭 柴田 潔